インタビュー◆西野一夫［日本図書館協会常務理事］

HELP TOSHO KAN

日本図書館協会 被災地図書館支援隊 始動！

インタビュー◆西野一夫［日本図書館協会常務理事］

2011年3月11日(金)、東日本大震災が発生。
東北地方太平洋沖での地震とそれに伴い発生した津波により、
東日本の太平洋沿岸地域に甚大な被害をもたらした。
一帯の図書館も大きな被害を受け、また図書館関係者もたくさん亡くなった。
日本図書館協会は震災後早々に被災地支援計画を立ち上げ、実行にうつしている。
そのひとつが「Help Toshokan」。ボランティアによる支援隊を被災地に派遣するというものだ。
第一回目は、4月21日(木)～24日(日)の四日間。支援隊が、宮城県気仙沼市に赴いた。
どんな支援を行ない、現地の様子はどうだったのか。
第一回活動報告と合わせて、日本図書館協会の被災地支援についての計画と状況を聞いた。
(このインタビューは2011年4月28日に行ないました)

被災地支援はマッチングが一番むずかしい

◎プロフィール
西野一夫(にしの・かずお)
1946年生。横浜市立大学文理学部卒後、1972年川崎市役所入所。
1977年より図書館勤務、2007年定年退職。
現在、大学での非常勤講師をしつつ、
日本図書館協会で常務理事としてボランティア活動を続けている。

気仙沼に限定して集中支援を行なうことを決めた

◆沢辺　「Help Toshokan」第一回被災地図書館支援隊が4月21日（木）から24日（日）にかけて日本図書館協会（以下、日図協）［注1］によって実施されました。僕も同行させてもらったんですが、その報告もかねて、日図協が取り組もうと考えている東日本大震災対策についておうかがいしたいと思います。

まず、日図協の震災対策計画はどうなっているか？　そして今回の第一回被災地図書館支援隊は現地で何をやってきたか？　その反省点、修正点は？　そして最後に日図協の今後の取り組み、以上の四点についてお聞かせください。

最初に日図協の震災対策計画はいまどんな状況ですか？

◆西野　はい。日図協のホームページ（http://www.jla.or.jp/earthquake/）でも公開していますが、日本図書館協会という組織は、みんなで持ち寄り、みんなで支えて、みんなで分かち合うというのが基本の精神で成り立っています。今回の震災支援は、その精神を最大限に発揮するべき時じゃないかという思いがありました。

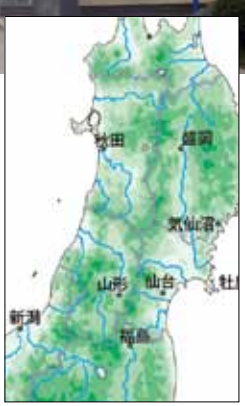
実は阪神淡路大震災のときに、図書館協会としての取り組みがきちんとできなかったという忸怩たる思いがあったんですね。関西の日図協の会員有志が支援部隊を立ち上げて、いろいろな活動はしたんですが、全国の図書館員がそれに協力するというところまではなかなかできなかった。今回はその反省をきちんと生かし、日図協として表現していく必要があ

注1●日本図書館協会……社団法人日本図書館協会。図書館事業の進歩発展を図り、日本の文化の進展に寄与することを目的として設立。1892年 日本文庫協会として設立され、1908年日本図書館協会と改称。1929年に社団法人となる。
東京都中央区に事務所をおく。趣旨に賛同した会員により運営される。運営費は、会費、寄付金、事業収入などによりまかなわれている。現在の会員数は、約8,000。ちなみに、年額会費は、個人会員9,000円、施設会員23,000円・37,000円・50,000円、賛助会員10,000円。
http://www.jla.or.jp/

「Help Toshokan」
第1回活動ルポ

4月21日(木) ～ 24日(日)、宮城県気仙沼市において第1回目の支援活動実施。
支援隊11名(支援隊員7名、日本図書館協会施設委員会4名)、車3台で東京中央区を出発。

今回、被災地での支援活動の現地拠点と
なってくれたのが、気仙沼図書館。
気仙沼図書館は、明治40年気仙沼小学校旧校舎
(市内八日町)に設置された児童図書館が始まり。
大正5年に文部省より町立図書館の認可を受ける。
自動車文庫「おおぞら号」を2台所有し、
広域な地域活動を繰り広げる歴史ある図書館だ。
http://www.lib-kesennuma.jp/



「Help Toshokan」
第一次支援隊が
行った宮城県
気仙沼市周辺。

4月21日(木)移動日

午前10時40分、出発。
長者原サービスエリアに着いた
支援隊一行。気仙沼清涼院（気仙沼市
本吉町大森地区)に到着したのは、
夜8時過ぎ。

ると思ったわけです。

被災した図書館や図書館の利用者たちの力になりたいと思っている会員はたくさんいます。ですから、まず日図協が旗をあげよう、みんなの気持ちが代弁できるような、そういう先行部隊になろうと。そこにみんなが結集してくる。

もちろんそこで大事なのは、被災地の方々の迷惑になる支援ではいけない、また、支援にミスマッチがあってはいけない、ということです。なので、そのためにまずは現地に行き、下見をし、意見をうかがい、そのうえでこの「Help Toshokan」計画を立てました。

第一次の支援策で考えたのは、地域を限定して、集中的にそこを支援するということでした。そこで学習して習得して、支援活動を東北や東関東に広げる。そういう戦略だったんです。

第一次支援として候補にあがったのが、気仙沼図書館です。気仙沼図書館は東北の中でも伝統ある図書館で、高台にあったということもあり、建物自体には津波の被害はなく、地震後の立ち上がりも早

日本図書館協会の被災地支援計画

●義援金募集……3月25日より、募集開始。5月11日現在の募金額、685万円。
●被災地域への公衆送信権の時限的制限の働きかけ……震災の被災により、資料・情報の入手が困難な地域を対象に、図書館の文献複写サービスによる複写物を、メールやFAXなどにより被災者や被災地の図書館や病院等の公共施設、救援活動を行なっている団体や個人などに送信すること許可してほしい旨を各関係団体に働きかけた。被災者支援の目的に限る。期間は被災地域の図書館が再開するまでの期限が想定されている。

●Help Toshokan……地震・津波・原発事故などで読書環境を奪われた被災地に直接間接の支援を行なう。現地の図書館と協議をしながら、支援を行なっている団体、個人が共同して支援を行なうようにする。

支援内容は児童書を中心に域内の分館や施設に避難している子どもたちへの配本、読み聞かせ、上映会など。

第1期(4～5月)は、気仙沼図書館を基点にした支援活動。

第2期(6～7月)では、支援地域の拡大、自動車図書館による配本活動の開始、義援金を活用した配本10,000冊の展開、ボランティアによる図書館復興支援の組織化、図書館関係団体による図書館復興に向けた共同の政府要請行動などが計画されている。

気仙沼市内の様子

気仙沼市内で通りかかった道路の瓦礫はほとんど片づけられていた(上)。津波のあとに火災にみまわれた鹿折(ししおり)地区(右)。JR気仙沼駅(下)。駅前の喫茶店、食堂、ホテルは営業していた。津波の被害がなかった、あるいは少なかった地域は徐々に日常を取り戻そうとしているようだ。

かったのですが、地域活動を支えていた自動車文庫が津波に流されてしまっていました。

そこで、4月7日（木）から三日間、まずは現地に下見に行かせていただき、図書館の方とお話を重ね、我々が支援できることを探りました。

自動車文庫が流されたことによって、地域の広域活動ができなくなってしまっている、それを我々が支援するという課題が見えてきたので、支援活動が始まりました。具体的なニーズは気仙沼図書館がつかんでいるので、マッチングを気仙沼図書館さんにやっていただき、その指示にしたがって、活動することにしました。

シャンティ国際ボランティア会の協力のもと、清涼院を活動拠点に

◆沢辺　あらためて確認ですが、下見に行かれた人数は？

◆西野　三人で行きました。

◆沢辺　このときはどこに泊まられたんですか？

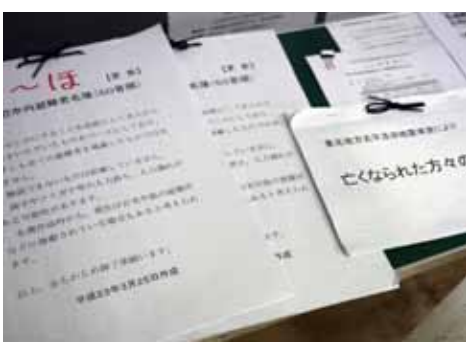
◆西野　日図協の会員の矢崎省三さんが提供してくれたキャンピングカーに寝ました。

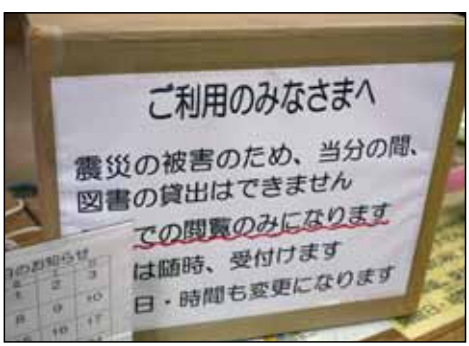
◆沢辺　そっか、そっか。

で、今回が、4月21（木）～24（日）の四日ですね。ざっくり行程を教えてもらえますか？

◆西野　人数が七人。東京から出発するもんですから、矢崎さんのキャンピングカーだけでは足りないので、レンタカーを確保して、21日は移動日。一日かけて現地に到着する。22日（金）、23（土）はまる二日支援活動をしました。金曜日は平日なので、学校など子どもたちがいるところを中心にサービスをする。土曜日は学校に子どもたちがいないので、避難所を中心にサービスをする。

それから24（日）は、帰還をするための移動日。四日間の日程ですけど、現地で活





午前中、気仙沼図書館にて、幼稚園に配布する絵本の仕分け作業(上)。
図書館内部は1階(右下)は片づけられ、なんとかオープンさせていた。2階は増築のためか、
柱などに亀裂が入り(左下)、現在、利用させていない。
また、自動車文庫「おおぞら号」(下中央)は津波に流され、見かけは原形が保たれているが、
使用できない状態になった。

動するのは二日間です。今後もそうなります。

◆沢辺　朝の10時すぎに東京を出発して、現地に着いたのは9時くらいですね。

◆西野　でしたね。休み休み行きますからね。

◆沢辺　東北自動車道は全線開通しているんですが、道路には補修のあとがあって、ところどころドーンとなる。

◆西野　すごかったですね。スムースなものではなかったですね。

◆沢辺　ただサービスエリアは燃料もレストランも含めて普通でしたね。タバコ以外は。

◆西野　タバコありませんでしたか？

◆沢辺　長者原ＳＡではね、洋モクのメンソール三種類しか残っていなかった(笑)

◆西野　4月21日（木）から24日（日）の第一回目の活動報告についての詳細は、写真を見ていただくとして、ひとつ付け加えておかなければならないのは、今回の活動については、シャンティ国際ボランティア会［注2］にお世話になりました。シャンティさんは、地震後早々と現地に入って、自分たちで拠点をもうけて、活動されていました。そこにひさしを貸していただいた。私たちにとっても初めての支援活動ですから不安もあったのですが、シャンティさんのおかげでとても安心して第一回目の活動ができました。感謝申し上げます。

◆沢辺　シャンティボランティア会は清涼院の敷地内にプレハブをつくりそこを活動拠点としてボランティア活動をしているんですが、我々の宿泊地としてそこにお世話になったということですよね？

◆西野　男性は基本車で寝て、女性陣三名はそこで宿泊させてもらいました。

注2●シャンティ国際ボランティア会（svc）……公益社団法人。タイ・ラオス・カンボジアに現地事務所を置き、アジアの子どもたちへの教育・文化支援を行なう。今回の東日本大地震では、震災後いち早く3月14日に被災地に入り、4月16日より宮城県気仙沼市の清涼院に拠点を置き、炊き出し、物資配布、入浴ができる場所への送迎などボランティア活動を行なっている。
http://www.sva.or.jp/

4月22日（金）葦の芽幼稚園

気仙沼市古町にある
葦の芽幼稚園で、
絵本約200冊配本とおはなし会。

◆沢辺　第一回目の支援隊で行ったのは総勢一一名で、そのうち四人は施設委員として図書館の建物の被害調査をし、残りの七人がボランティア実働部隊ですよね。

◆西野　ええ。雨が多くてとても大変でしたね。水道が回復していないので、食事が満足にとれなかったというのが実態だった。僕らは野外で調理するつもりでいろんなものを持って行ったんですが、雨が降ったり、時間的なこともあり、それができなかった。

逆に被災地で、我々が助けられてしまったということもありましたね。

たとえば二夜目は、現地のお花見会に招待されたりね。そこで、被災して避難所で避難生活を送っている子どもたちを含めた三〇人くらいの方々と交流できたし、行っているボランティア同士の交流もできたし、お花見をするくらい元気になってきているんだなと直接に感じることができたのも有意義だった。シャンティさんにお世話になっていなければそういう経験はできなかったので、ほんとにシャンティさんに感謝したいですね。

◆沢辺　清涼院は避難所でもあったので、そこに避難している方々もいたんですよね。で、僕らが行った夜に偶然、お寺にある立派な桜をライトアップして、共同お花見会があった。それに僕らも誘われたんですね。

後片づけから復興へと気持ちが前向きになっていた

◆沢辺　清涼院は、気仙沼のはずれにあるんですか？

◆西野　本吉町大森地区というところになるんですが、前は本吉町といって、２００９年に気仙沼市と合併したんですね。漁業で成り立っている町です。気仙沼からすると、市街地の南で市の中心からは車で二〇～三〇分かかっちゃうところです。

4月22日（金）愛耕幼稚園

気仙沼市反松、愛耕幼稚園にて、
持参した絵本を子どもたちに手渡し、
ホールに集まった園児90名ほどにおはなし会。
その後、九条地区にある九条幼稚園にて、
同じく絵本の配本と、お迎えを待つ20名ほどの
子どもたちにおはなし会を行なう。

◆沢辺　水道はまだ開通してなかったですね。気仙沼図書館も水はだめでしたよね。

◆西野　あそこは高台だったということもあり、まだでしたけど、市街地の住宅地は水道は復旧してましたね。

それから我々が行った避難所（体育館）、唐桑地区というところですけど、あそこは水道が復旧してましたね。部分的に復旧しているという感じでした。

◆沢辺　現地は電気はついてましたよね。

◆西野　ついてましたね。

◆沢辺　気仙沼の町の様子について、どうでしたか？

◆西野　私たちが下見調査に4月初旬に行ったときは、お店は赤提灯の飲み屋さんが一軒だけ、酒屋さんも一軒だけ開いているだけで、あとはなんにもなかった。コンビニも開いてはいたんですけど、朝行っても、食料なんてものはなくて、まだ物資が行き届いてないなという状態だったんですけど、今回行ってみると、コンビニにものがあるし、酒屋さんも数軒営業していたし、食堂も何軒か開いていたし、ホテルも営業再開していたし、復興のほうにようやく歩みをはじめているなと感じましたね。

その前行ったときは、後片づけが精一杯で、復興までには気がまわってないな、これは大変だなという状態でしたが、非常に初歩的な段階ですが、復興のほうに気持ちが向き、みなさん非常に前向きになってきているなと感じましたね。

◆沢辺　二日間の活動を少し説明すると、金曜日は幼稚園、小学校の読み聞かせと、本を届けました。

土曜日は午前中は幼稚園に行って、午後が避難所での読み聞かせですね。

◆西野　気仙沼の小原木中学校の避難所ですね。一八九人の大所帯で、とにかく人がすごかったですね。一時は避難している人が二五〇人を超えてたそうです。そうすると一畳あたりに二人の計算になって、山小屋状態だったそうです。僕らが行ったときは一八九人になっていたので、

4月22日(金)清涼院

清涼院敷地内。
シャンティ国際ボランティア会が建てたプレハブと、車が並ぶ。
支援隊一行は、女性3名がプレハブで、男性が車で寝泊まりした。
22日の夜は、集落のお花見会。地元での恒例行事のようで、
災害があったが今年も決行された。テントに舞台が作られ、
ボランティアや、地元出身の歌手が演奏したり、歌ったり。
最後は集落の人が一緒になって大漁のうたも。

なんとかその状態は脱していましたけど。とはいえ、夜になって、外に出かけていたみなさんが帰ってきたときには、ぎしぎしで酸欠状態になるんじゃないかと思いましたね。

避難所でのエピソードですけど、中学校の避難所に行って、帰ろうとしたらちょうどお昼だったんですね。ラーメンを食べて行きませんか？と声をかけていただいた。僕らはインスタントラーメンかなと思っていたんですけど、どうも様子がちがう。子どもたちが食べているのをみたら、ぶあついチャーシューが三つも四つも入っている。

食べさせてもらったら、これがすごい。東京でもちょっと食べられないくらいおいしい豚骨ラーメンだった。たまたまラーメンの炊き出しがあって、専門家の人が作ったようです。

沢辺さんのツイッターにも書かれてましたが、我々は被災地に支援にいって、支援されたという、ね（笑）

映画上映、読み聞かせ……現地からの要望が届いている

◆沢辺　気仙沼での活動は、気仙沼図書館が幼稚園や小学校、避難所とのセッティングをしてくれたんですよね。

◆西野　していただいたんです。先導役も一部していただいたり、たいへん気を使っていただきました。

◆沢辺　読み聞かせをやれる人がもう少しほしかったんじゃないんですか？

◆西野　結果的にはそうですね。読み聞かせというのは熟度が必要なので、僕みたいに二〇年も前に一年か二年やっただけの人間が突然やろうとしても、やっぱり子どもたちは全然だめだなってすぐ見抜くんですね。

今回はたまたま浜地真知子さん（立川市上砂図書館）と椎原綾子さん（目黒区立八雲中央図書館）というベテランのおふたりが参加してくれて、非常に熟度の高いおはなし

4月23日(土)若草幼稚園

午前、唐桑地区
若草幼稚園にて
配本とおはなし会。

会をしていただいた。それでこれだけの成果がでたんじゃないかなと思いますよ。

◆沢辺　実際に活動を行なってみて、反省点、成果についてはどうですか？

◆西野　反省点としては、我々は公共図書館を中心に考えると、どうしても子どもを中心に考えてしまうんですが、被災地でいちばん楽しみを奪われてしまっているのは、高齢の方ですから、そういう方々にいいサービスができないかと。

現地から、映画をやってほしい、という声が届いています。なので、被災地に映写機をもっていこうかなと。これは権利関係もありますが、きちんと了解をとって持ち込みたいなと思っています。

今回行って感じたのは、子どもたちのなかには親を亡くしたり、家を亡くしたりした子もたくさんいたと思うので、かなりの子がしゅんとしているのかなと想像したんですが、実際はいたって元気で、反応もすごくよかった。逆に我々が励まされたということがあるんで、ぜひもう一度会いに行きたいというのが、率直な感想ですね。

成果ということでいえば、現地から要望がいくつか届いています。具体的に言うと、さっきの映画をやってほしいということもそうですし、気仙沼に大島という離島があるんですが、そこは津波と山火事でひどい被害を受けてしまった。なかなか連絡がとれなかったのですが、ようやくとれるようになったところ、子どもたちが本とおはなし会を待っているので、ぜひ来てほしい、と。

同じ日の午前中の時間に、保育園と幼稚園、小一から六年生までのクラスでおはなし会をやってほしいとリクエストが来ています。同時にやらなくちゃいけないので、読み聞かせ部隊が八人必要になるんですが、これは第四回目（5月26日～29日）に実施しようと考えています。

大人数になるので、どうしようかなと思ったんですが、いろいろやり方があるということに気がつきました。

4月23日(土)小原木中学校避難所

午前、小原木中学校避難所にて配本とおはなし会。避難所では、子どもが集中できる環境を作るのはむずかしいことがわかった。紙芝居やパネルシアター、人形劇などのパフォーマンス型出し物が有効だと感じる。最後においしい本格ラーメンをいただく。

たとえばいま、池袋から深夜バスが気仙沼まで一日一本出ているんです。それを活用すれば日帰りでサービスができる、と。

◆沢辺　映画は、テレビでやるんですか？

◆西野　スクリーンとプロジェクターを持って行って、DVDをかけようかなと考えてますけどね。

広域の地域活動をやってきた気仙沼図書館だからこそ成り立った支援活動のマッチング

◆沢辺　ともかく、支援隊としては、やれることをやりつづける以外にはないということでしょうか。

◆西野　とにかく第一次の「Help Toshokan」を誠心誠意やりつくすことですよね。やればやるほどあれもしてくれ、これもしてくれと出てきそうです。それだけ僕らはニーズのある活動をしているんだなということは感じてますけど、とにかくできるだけいろんな注文に応えたい。これはできませんとは言わない。それが大事だと思います。

◆沢辺　要望が出たのはどこからですか？たとえば小学校全学年の読み聞かせの要望が出ているのは、それは気仙沼図書館を経由して東京に届いた要望なんですか？

◆西野　そうです。

◆沢辺　気仙沼図書館が日常的な付き合いの中で、地域の幼稚園や小学校に声をかけて、読み聞かせをやりますが、どうですか？というようなことになったんですか？

●第一回支援隊、おはなし会の内容

◎絵本
「おしくら・まんじゅう」
「ちゃんとたべなさい」
「はらぺこあおむし」
「きんぎょが にげた」
「やさいのおなか」
「てぶくろ」
「そら はだかんぼ！」他
◎パネルシアター
「カレーライス」
「おせんべ やけたかな」
◎手遊び
なっとう
ひとつと ひとつで なんのおと、
さよなら あんころもち、他

4月23日(土)気仙沼図書館

午後、気仙沼図書館でのおはなし会。
災害後であり、当日は雨も降ったため、
参加者は残念ながら少数だった。
最後に、気仙沼図書館の館長はじめスタッフと
今後の支援のあり方を相談。
地域での配本や読み聞かせ活動は今後も予定通り
続けることに。活動場所は、気仙沼図書館が決めるが、
その後については、受け入れ側の担当者と
図書館協会が直接連絡をとり合って決めることとなった。

◆西野　そうですね。
もちろん、なかには本はもう十分あるからいいです。小学校もやっと授業が始められたばかりでおはなし会どころではない、今回は遠慮しますというような声もあったそうです。
ですから反応はいろいろなようです。
◆沢辺　さっき気仙沼図書館は地域活動をよくやってたということでしたが、それは自動車文庫をまわすとか、そういった活動ですか？
◆西野　八〇カ所回っていたそうです。特に小学校とか保育園とかをまめに回っている。
◆沢辺　八〇カ所のなかには小学校・中学校が入ってるんですか？
◆西野　いっぱい入ってます。
◆沢辺　それは旧気仙沼市ですか？
◆西野　いえいえ、本吉町も唐桑地区も全部いれて。
ですから、気仙沼図書館はすごい広域活動をしてたんですね。それが今回わかりました。
◆沢辺　だから、幼稚園や学校との付き合いがあったのですね。
◆西野　そうです。ふだん付き合いがあるので、お話がスムースにすすんでるんだと思います。ふだん付き合いもないのに、今回急におはなし会などの話を持って行っても、ふだんなんでやってくれないの？と言われるだけだと思いますよ。
◆沢辺　ですよね。ある日突然、気仙沼図書館から幼稚園に電話がかかってきて、東京から図書館員が来ておはなし会をやりたいのでそっちで受け入れてくれませんかと言われてもね？
◆西野　怒っちゃうところもあると思いますよ。ふだん何もサービスもしてないのになんでこんなときにサービスするんだって。
やっぱりふだんいいサービスをしてるから、みなさん喜んでくれるんじゃないかな。
◆沢辺　思い返してみれば、僕らが行った

幼稚園にも、図書館で作っただろうなと思うおはなし会のポスターが貼ってありましたよね。想像ですけど、気仙沼図書館の人が作ってくれて、それぞれ配ってくれたんでしょうね。

◆西野　ふだんから行ってたんだと思います。

◆沢辺　そうですよね。そういう付き合いの延長で今回の話が成立したわけですね。

◆西野　気仙沼図書館は児童室を持っていて、隣に小学校があるんですけど、小学校から直接児童室に入れるようになっているんですね。学校帰りや休み時間に。昔から児童サービスにおいて、そういういい関係が成り立っているんだなと想像がつきますよね。

自動車文庫を活用したいという声も多数出ている

◆沢辺　今回の活動について、被災地ではないところから日図協に届いている反応はあるんですか？

◆西野　日図協のホームページで活動を流しているんですが、それを見て、僕らと協力してやりたいという話が次から次ときていますね。

たとえば栃木のある会社の社長さんなんですが、本を集めて、被災地に臨時図書館を建てたい、と。それについては全然ノウハウがないので教えてほしいという申し出がきてます。

また、JC（日本青年会議所）からは、子どもたちの図書館とか学校図書館の支援を、全国学校図書館協議会や日本図書館協会と連携してやりたいと。データをつけたり、カバーをかけたり、本を選定したりといったノウハウがないので、そういうところでご協力をお願いしたいということでした。

6月から一万冊をニーズのあるところに配布していきたいという日図協の計画を見て、これなら協力ができるかなという

ことで、申し出をいただいたようです。それから、移動図書館として車を用意して、東北地方を一年間かけて回るということを決めた印刷会社もありますね。図書館協会が持っているノウハウを吸収しながらやりたいと言っていただいています。すでに移動図書館用の車を二台注文したと聞いています。

実は、図書館の自動車文庫で、外国に送るために国にストックされているものがあるんですよ。それを活用して支援活動をしたいというグループもあらわれています。

国が保管している自動車文庫を一時的にみんなで共同して活用して支援活動する、というプロジェクトも立ち上がっています。

日本図書館協会も自動車文庫をすでに一台確保できそうなので、とりあえず気仙沼図書館に送り、我々もそれに協力して行くというめどが立ちました。

自動車文庫については、次のステージも考えていて、自治体がこれから廃車を予定している車を寄贈する。しかし車検もこれからなので、けっこうお金がかかります。その金額をどこが持つのかという問題はあるのですが。被災したところはお金がありませんし、しかも小さな自治体でも余力はありませんからね。それを協会がどううまくアレンジできるか。それは知恵を出さないとね。

◆沢辺　しかし、一台の自動車文庫が東北をまわるというのは、現実にはむずかしくないですか？

つまり貸すということは、返さなくちゃいけないわけじゃないですか？

◆西野　そうですね。

◆沢辺　図書館の巡回車だと、週に一回やってきて、新しいものを貸し出して、以前借りた本は返してもらう、そういうサイクルができているわけですよね。書店のように売っちゃっておしまいなら一回来てバイバイといなくなってもいいんですけど。

◆西野　確かにね。貸すというより配るということになりますね。

◆沢辺　でも地元の図書館に返してくださいという手もありますよね。

◆西野　ありますね。

◆沢辺　出版業界も震災対策本部を作ってますね。

◆西野　作ってますね。三〇万冊の新刊を被災所に配る。それから夏と冬を予定しているようですけど、被災した学校の子どもたちに図書券を配るとか。

◆沢辺　出版業界も自動車文庫を二〜三年出せばいいのにね。

◆西野　自動車文庫は一台二千万円ほどかかるんです。本も出すとなるとさらに一千万円くらい予算がないと。しかも、東北や関東を回って、本を配るとなると、資料代も一千万円じゃ足りない。自動車文庫はたしかに非常に有効だと思います。ただ、問題は自動車文庫用の車を改造できる会社が一社しかないということなんです。林田製作所という規模の小さい企業だけなんです。受注がいま殺到しているので、半年、一年後まで順番待ちという状況なんです。アイデアはいいんですけど。

◆沢辺　そうなんだ。

◆西野　自動車文庫用の車は、バスの中をいったん全部壊して、そして改装していくんですね。だから特殊なノウハウをもっていないとできないんですね。

ただ本を送るだけではだめじゃないか、マッチングが重要だ

◆西野　ここ二〜三カ月は支援活動のはじまりなので、これから半年や一年ではない長い活動がはじまるので、どういう活動がいいのか、じっくり考える必要がある。問題は、半年、一年、あるいはさらにそのあとのことだと思うんです。いまはいろんな方が支援に入っているから、みん

な元気にはなってるんですよ。だけどこれが二〜三カ月すると、一人減り、二人減り、となって、もとの生活にだんだん戻ってくるわけですよね。しかも家もない、親もいない、そういう現実がつきつけられてきてしまう。なので三カ月支援して満足だというのではいけない。細くてもいいから長い活動が必要、我々が手を挙げた限りは長い活動を続けていくことが必要だということです。

今回の第一次支援計画が終わった段階でもう一度、支援のあり方を再構築していかなければならない。まだまだ甘い計画でしかないので。

本を送るといっても具体的にどういう本を誰にどういう形で送るかという戦略もまだ見えていない。その準備もやりながら考えていかないといけない。

◆沢辺　選書が必要ですよね。

◆西野　そうなんです。向こうのニーズにあった選書をしないといけないんです。ただ送ればいいというものではない。

◆沢辺　そのマッチングが一番むずかしいよね。

◆西野　ミスマッチになっちゃう可能性がいくらでもある。それは阪神淡路大震災のときに私たちが感じたことなんです。結局、よかれと思ってどんどん本を送るわけです。図書館で除籍したものも送る。結果、全然使われなかったという現実があるんですよ。

◆沢辺　除籍したものなんていらないもんね。

◆西野　いらないから除籍するわけですから。

◆沢辺　それと図書館員たちが日常的に困っているのは、寄贈じゃないですか。市民は親切のつもりで寄贈してくれるんだけど、実際に役に立つものは少ないわけですよね。それを日々感じているはずの図書館員が除籍した本を送りましょうというのはダメでしょう。

むしろ出版社と協力していくことを考えたらいいんじゃないか。たとえば気仙沼

図書館など被災した図書館は、ほしい本のリストをネットワークで申し込めるようにする。それら各図書館ごとのニーズを日本図書館協会が集約して、出版社ごとにリストにして各出版社に依頼する。そこで各出版社は個別それらの本を出せるのかどうかを検討する。そんなふうに、欲してもらえる本をきちっと渡せるシステムをつくんなきゃいけないんじゃないかなと感じますね。

出版界も三〇万冊配るといってるけど、いくら新しいからといってもニーズ無関係だとね。

◆西野　一応年齢別には分けていると聞いています。

◆沢辺　子どもの本ならね。だけどたとえば定番が入っているかとかも重要でしょう。もし本が全部流されてまったくないとしたら定番の『はらぺこあおむし』は図書館はほしいと思いますよね。そういう「うちはこれがほしい」といえるようなシステムが求められる気がするんですね。

日図協が動けば可能じゃないですか？

◆西野　いやいや、言うはやすしですよ。それだけのコーディネートをするには人員は確保しなければならないし、それから資金力ね。僕らが目標にしている一千万円じゃとても足りない。ひとけた違います。

◆沢辺　今日も出版業界紙に、図書館に本を届けるという記事が載っていましたね。

◆西野　いや、あれは図書館に届けるんじゃないんですよ。

◆沢辺　あれそうだっけ？

◆西野　僕ら手をあげたんですが、残念ながら当面、図書館は考えてませんということです。

◆沢辺　図書館じゃなければ、どこに本を送るの？

◆西野　被災地に送るということですすめていると聞いています。

◆沢辺　だけど、新しい本だからといって被災地に送られてもね。

◆西野　うーん、実際はやってみないとわからないところも多いかもしれませんね。できるだけ現地の書店を通して送りたいというアイデアもあるようです。

◆沢辺　僕ね、今回避難所に行って商業って偉大だなってあらためて感じたんですよ。というのも、避難所に食料が偏って送られてきていて、余っていたでしょ。

◆西野　ある部分はあり余るほどきてましたねえ。

◆沢辺　プッチンプリンが段ボール一個……

◆西野　ヨーグルトが山のようにあったりしてましたね。

◆沢辺　でね、小売店ってすごいもんだなってあらためて思ったんですよ。

◆西野　そうですねえ。ニーズをちゃんとつかんで、それだけのものを入荷して、売り切って、ゴミにしないんですから。

◆沢辺　あそこはただで持って行っていいよといってるのに余っていて、かたや商売はお金をとって必要なものを渡せるわけで、無駄をわずかにしている。商業って偉大ですよ。

これと同じことが実は本にも言えるんじゃないかなという気がしてね。ほんとに何もかも流されたら、ないよりあったほうがいいということになるかもしれないけど、これからは少しずつ入っていくわけですから。

特に児童書はユニセフとかがいっぱい持ってきてるわけだから、必ずしもどんな本でもほしいわけじゃないよ、と。

◆西野　そういうところもありますね。

◆沢辺　むしろここの避難所にいる子どもにはこの本を、という機能がなければ、ほんとの意味でのマッチングはできない。それができる可能性があるのは、書店員とか図書館の人じゃないか。

◆西野　書店の人ですね。

◆沢辺　図書館員だって候補だと思うけど。

◆西野　まあそうなんですけど、そこまでご用聞きができる図書館員がいたらお会いしたい。

◆沢辺　ははは。

話を戻すと、今回の支援隊活動の総括としては、長く続ける。具体的な要求、欲求に対して的確に応えていく、ということですね。

◆西野　その結果として図書館同士の協力関係が阻害されてしまったというのはだめなんで、我々が支援することによって、東北なら東北の県同士の結びつきが強くなったとか、協力関係ができるのが我々の目的の一つなんです。

ただやったからよかったねということではだめだと思います。

何が足りないかではなく持っている条件の中で何ができるかを考える

◆沢辺　ではそうしたことをやろうとしたときに、いま日図協に何が足りないですか？

◆西野　いや、逆にいまできることをやるということですよ。

夢をいっぱい描いてできもしないことをやろうとしてもマイナスの効果しかない。いまの日図協が持っている条件は非常に狭いと思います。その条件でやれることは何かと考える。身の丈の範囲できちっと考えて相手のニーズをちゃんとつかんで、喜んでもらえることをやる、ということだと思うんですね。

◆沢辺　いまこの被災地支援を担当しているのは、日図協では西野さんだけですよね。

◆西野　もうひとり西村彩枝子さんという方と二人でやってます。あと週何回かのボランティアにひとりふたりと手をあげてくれています。

◆沢辺　そうですか。

◆西野　私も日図協に期待したいんですけど、もともとそういうノウハウもなく、ようやく今から身につけるという段階ですし、アメリカの図書館協会のように何万人も会員がいるというわけでもないので、

資金力もないわけですから。ボランティア活動が前提の組織ですし。自分の実力を知ったうえで、できることをやっていくということ、そういう計画をきちっと構想するということが大事だと思うんです。

◆沢辺　西野さんは常務理事ですか？

◆西野　はい。名前は常務理事だから、みなさん毎日のように来ているように思うんですけど、常務理事というのは月一回の常務理事会に出る人が常務理事なんです。月一回ですよ。

◆沢辺　机もないんだ。

◆西野　机もないし、任務もあるわけでもない。

たまたま私はフリーハンドであるから、さまざまなことをやってますけど、現役時代は会議に出るだけでしたから。名前が誤解を生んでるようなんです。

いわゆる公益団体の理事にあたるのが、我々常務理事ですね。

◆沢辺　だからいきおいリタイアした人たちがボランティアでやるということになっているわけですよね。

◆西野　そうですね。

◆沢辺　若い無理のきく実動部隊があるわけじゃないと。

◆西野　なかには大学院生もいますけど。

◆沢辺　一般の会員の方から反響はありましたか？

◆西野　まだ意見はきてません。ただ、今回の「Help Toshokan」のボランティアについては、たくさんの応募がありましたね。これができます、あれができますと。

ですから、みなさん評論家になろうとしてるわけじゃなくて、実際に行動を起こしたいんですね。

◆沢辺　ボランティアしたいのというのは図書館員の方ですか。

◆西野　ほとんどそうですね。ただ書店員の方もいましたね。書店経営者という方も。

◆沢辺　現地の反応はどうでした？

◆西野　避難所の女性からは、ちょっと古くてもいいから女性雑誌みたいなのがほしいわっていう声はありましたね。ただ、たとえば東京みたいにちょっと行けば図書館があって、利用者もいるというようなところでしたら、図書館がないとさびしい、不便だと思うんですけど、幸か不幸か今回被害があったところは図書館が比較的少ないところなんですね。ですから図書館を利用されている方は圧倒的に少ない。別に図書館がなくなっちゃったからとても困っているという人は残念ながらそんなにたくさんいるわけじゃない。高齢者の場合は、ボランティアもできないので、一日ずっと避難所に座っているだけなんですよ。何もやることないんですよ。なぐさみが必要ですよ。テレビだって一台しかないから好きな番組は見れませんから、結局ニュースなんですよ。

◆沢辺　『はらぺこあおむし』を読み聞かせしても、おもしろがってくれるお年寄りもあんまりいないだろうしね。

◆西野　『はらぺこあおむし』をおもしろがってくれるのは、子どもでもせいぜい六歳くらいまでですよ。今回の避難所での読み聞かせも、最初は聞いてる子が八人いたけど、最後はひとりになっちゃったんですよ。そういうことも実際におこったりしました。僕らは図書館が大好きだけど、みんなが大好きだというわけじゃないですから。

◆沢辺　だからそこに滞在して、介在して、なんとなくニーズを引き出して、というようなコーディネートというか、結局すべて人なんですよね。それがないとマッチングはなかなかしないね。

日図協の活動の支援を拡げるためにも速報体制を整えていかねば

◆沢辺　最後に当面の短期的な予定を教え

てください。

◆西野　ボランティアをやりたいという人から、連休中やってくださいという要望もあったんですけど、逆に学校にも子どもたちはいませんし、ボランティアの人たちがたくさん入るでしょうから、ゴールデンウィークはあえて避けて、5月12日（木）～15（日）と、19日（木）～22日（日）、26日（木）～29日（日）のそれぞれ四日間をいま気仙沼図書館さんにマッチングをしていただいているところです。この四回で、第一次支援はいったん打ち切りです。

◆沢辺　第一次支援隊の費用はどこから出すのですか？

◆西野　原資については、事前にお断りしていますが、日図協が募っている義援金の一部を支援活動ということで使わせていただきます。

いま計算しなおしていますが、食料は別としても一回の遠征に一二～一三万円かかっています。その前の準備金もやっぱり一〇万円近くかかっているので、毎回一五万円くらいの出費を覚悟しなきゃいけないんですけども、天候が不順だと我々自身が被災したようなもっとひどい状況になってしまうということがわかったので、二回目からは、民宿を確保したいと思っています。食事を全部作っていたのでは活動できないので、民宿で食事も作ってもらう。そうなると一回二〇万円くらいかかってしまうでしょう。

ただ、ボランティアのなかにはお金は自分で負担してもいい、という方もいらっしゃるということがわかりましたので、次回からは、どこまでは自分が負担しますという選択ができるようにしたい。なんでもかんでも義援金を使うというものでもないので。そういう形を徐々にとっていきたいと思っています。

◆沢辺　いま日図協の義援金はいくらぐらい集まっているんですか？

◆西野　二〇〇万円くらいになっているはずです。出足としては非常にいいと思っ

【図1】第一回支援隊に同行した沢辺が、
現地からリアルタイムに報告したツイッター画面(右)。
http://togetter.com/li/126719
帰京後、フリッカーにアップした写真(下)。
http://www.flickr.com/photos/41585003@N02/collections/72157626463353377/

ています(編集部注●5月11日時点で、六八五万円になった)。

五〇〇万円の目標だったんですが、私は一千万円にあげるべきじゃないかなと思いますけど。

ですから、いい活動をすればするほど、活動はできないけれども、お金で支援したいという人は出てくると思うんですね。それを期待したいと思います。

◆**沢辺** 僕からあえて要望をいうと、もう少し報道体制というか、報告体制を整えたいですね。

◆**西野** そうですね。今回沢辺さんが現地からツイッターで報告を流してくれたようにね[図1]。リアルタイムに情報を発信していくというのは重要ですよね。帰ってきて、結果をパソコンで打ち出しているようじゃ遅いですよね。

◆**沢辺** たいしたことといらないんですよね、文章は。どこでなにをやっていたか、それに写真がついているということが必要なんじゃないかなと。

それが日図協のホームページにリンクされているとか。

◆西野　写真でいえば、肖像権の問題もあるわけですが、この写真はいいです、この写真はだめですというような人は困るなあ。公に自分の顔がさらされるんだということを了解したうえで行ってもらうようにしたいと思います。

◆沢辺　名前もそうですよね。○○図書館の○○さんがボランティアに行ったんだ、という人の顔が見えてくるということが大切でね。

◆西野　この活動はアピールを目的にやっているわけですから、参加した人たちもそれは覚悟してもらわないと。それから子どもたちのプライバシーにも配慮しなければならないけど、子どもたちにもあらかじめ、これは全国のみんながみるかもしれないよと了解してもらっておく。これはみんなの支援をお願いする活動の一環なんだから。

◆沢辺　僕もね、写真をアップするときに、子どもの写真をどうするか迷ったんです。子どもたちの表情をアップで撮っているんですね。迷ったんだけど、東北の子どものあの表情が見えるから、この活動の意味が感じられると思うんです。それを昨今の個人情報の規制でのっぺりさせられちゃうとね。

まあ、話を戻すと、速報体制みたいなものはもっと必要ですよね。

◆西野　そうですね。参加するメンバーにぜひツイッターをやってもらいたいですね。

◆沢辺　今日はどうもありがとうございました。

編集後記

●私のところにも「揺れ」はやってきた。なにしろ気が動転していたので、記憶が定かではないのだけれど、何かに掴まっていたような気がする。長い揺れがおさまってから司書室の周りをみると、以外にも物は収まるべきところに収まっていた。やれやれと思って閲覧室に目をやると、そこには今まで目にしたことの無い光景があった。展示ケースは倒れ、ブックトラックは走り、低い書架は好き勝手な方角を向いていた。そして、スチール製複式7段8連の書架が4基とも動いていた。転倒防止に頭をつないであったので、4基一緒に50センチほどジャンプしていた。当然書架の間の通路部分には本の山。

修復のために全部本を降ろして床に積み、書架を元の位置に戻して、ねじれた部分を修理し、耐震補強を強化してもらった。その間一ヶ月、復旧作業に明け暮れた。私一人の手に負えるものではないので、教職員や生徒にも手伝ってもらった。

床に積まれたたくさんの本の山を、かいがいしく運んでくれる生徒に感謝しながら、一緒に作業をしているうちに別の思いも浮かんできた。利用という観点から見れば、一度も手にとられない本も少なくなかった。また、図書館を利用しないで卒業する生徒も少なくない。彼らにとって図書館（この多量の本）の重さってどうなんだろう。生徒が帰った後にしばし考えてしまった。

どうしたわけか我が家のトイレには「般若心経」が貼ってある。これが「存在」の原理なのかと感じ入っている毎日である。しかし、これだけでは俗人の日々の生活に起こる戸惑いや悩みの解決には直接に結び付かない気がする。そんなことを考えていると「真理はわれらを自由にする」という宣言を思い出してしまった。一体全体真理って何だっけ？　はたまた自由とはどういうことなのかしら。本当に真理はわれらを自由にするのだろうか。

原理を否定するつもりは毛頭ないけれど、私などはいつも方法の世界で躓いているからそこまで思いが至らない。原理や真理という高いものを仰ぎ見ながらも確信がもてないでいる（けなげに多量の本を書架に納めてくれる生徒の姿を見ながら図書館って何だっけ?と思ってしまう）。

さて新たな混乱が舞い降りてきた。紙という媒体から電子という媒体に変わることによって流通する「情報」量の膨大さは目を見張るものがある。しかし、膨大な「量」の前に「知る自由」が戸惑っている。多いが故に無いに等しい状況をつくってしまう。これを解決するにはガイドが必要になる。とすれば誰かが・何がしかの機関が評価しなければならない。その評価を頼りに「知る」のであれば「知る自由とは」そもそも何？

しかし、考えてみれば紙の世代でも、ある種のフィルターや評価の結果として出版されている。選定するときもそうしたことを考慮しながら選んでいたはずだ。大して変化は無いのかもしれないとも思ってしまうのは早合点でしょうか。

生徒たちもネットの検索で調べ物をすると安直に回答らしきものが表示されるので便利に使っている。参考図書の出番はめっきり減って、書架の重石になっている。しかし、最近は「検索エンジン」によって違う「検索結果」が出ることに困惑していることもあるようだ。ただ「便利」というわけにはならないと気付き始めたような感触が漂っている。

そんな生徒との掛け合いを演じていられるのもあと一年を切ってしまった。三五年も図書館の仕事を続けてきても、どうも確信がやってこない。単なる私の性格・資質によるだけのことなのでしょうか。大震災は私個人にもさまざまな波紋を残していった。

［真々田忠夫］

図書館とメディアの本
ず・ぼん⑰-03

●インタビュー　西野一夫［日本図書館協会常務理事］
Help Toshokan　日本図書館協会被災地図書館支援隊、始動！
●ず・ぼん編集委員会
小形　亮／齊藤誠一／手嶋孝典／東條文規／堀　渡
真々田忠夫／大田洋輔／沢辺　均／那須ゆかり
●デザイン
沢辺　均
●写真
沢辺　均
●発行・バージョン
2011年5月20日［PDF版 ver.1.1］
●発行所
ポット出版
150-0001 東京都渋谷区神宮前2-33-18#303
電話 03-3478-1774　ファックス 03-3402-5558
ウェブサイト http://www.pot.co.jp/
電子メールアドレス books@pot.co.jp
郵便振替口座 00110-7-21168 ポット出版

ISBN978-4-7808-5053-6 C0000
©NISHINO Kazuo, Pot Pub. Co., Ltd

Library and Media books
The ZU-BON 17-03
Edited by the editorial of ZU-BON

Editor: OGATA Ryo/SAITO Seiichi/ TEJIMA Takanori/TOJO Fuminori
HORI Wataru/MAMADA Tadao/OTA Yosuke/SAWABE Kin/NASU Yukari
Designer: SAWABE Kin
Photo: SAWABE Kin

First published in Tokyo Japan, May 20, 2011
by Pot Pub. Co., Ltd.
#303 2-33-18 Jingumae Shibuya-ku Tokyo, 150-0001 JAPAN
E-mail: books@pot.co.jp　http://www.pot.co.jp/
Postal transfer: 00110-7-21168

ISBN978-4-7808-5053-6 C0000

掲載された写真はご自由にご利用ください。